

鳥籠の天使

詩 by 塔野夏子

鳥籠

いけないと知りながら
またこの場所に来てしまった
もっといけないと知りながら
今日は君をつれて来てしまった

けれどそう どうしようもなく
ここが僕の知るかぎりいちばん素敵な場所
きれいなガラス玉がいくつも
宙にふわふわと漂っている
そのあいたを縫うように
銀の星を浮かべたほそい川がゆくよ
流れとからみあう風は
涼やかな香りをはこんで
たとえようもない心地よさ

とりどりのまばゆさまき散らし
メリーゴーラウンドが回りだす
大きな時計の振り子が天から下がってる
仄かに光り 波のように 行ったり来たり

ほら青い薄衣をまどって
丘のうえに月がやってきたよ
ピンクの花火 いくつも空に架かったら
秘密の空中迷路庭園の門が
開かれる刻限さ

手をつないでいざなえば
君の瞳ももう夢に漂いはじめてる
けれどふと 君は立ちどまって
あれは何 とたずねる

さっきからずっと どこからともなく聴こえつづけてる
空気をこまかく震わすような あの響きは 何

あれは はばたきの音さ
僕が昔飼っていた小鳥の
そうだね 君によく似ていた
たいせつにしていたよ
僕がはじめてここにやって来たのは
その小鳥が死んでしまった夜さ

TILL第8号(新風舎・2000年)藤原龍一郎氏選「黄昏詞華館」佳作掲載

五行歌 by 南野蕃子

わたしの中で
何匹もの
天使もどきが
清らかに
墮落する

ひずんだ翼で
ひずんだ空を
それでも
飛んで
みたかったのだ

自分を入れた鳥籠を
さげて歩いている
後ろの正面が
誰なのか
いつまでも知らない

あまりにも
美しい
闇だ
翼がなければ
落ちてはゆけない

どうか
君の接吻を
遠い日
爛れ落ちた
翼の痕に

まばたきの多い
その眼差し
青ざめた小鳥の
果敢ない
羽ばたきのような

銀の鳥籠
水晶の止まり木の
二人
一度きりの
華奢な口づけ



五行歌の初出はすべて月刊『五行歌』誌(五行歌の会同人誌) 一部は南野蕃子五行歌集『硝子離宮』(市井社)収録

塔野夏子(とうのなつこ)／南野蕃子(みなみのしょうこ) @KGogyoka (五行歌人四人のグループ「栢瑚(kashiko)」のツイッターID)

塔野夏子:南野蕃子と同一人物。高校生の頃から詩作を始める。1998年に詩集『透明塔より』(新風舎)を出す。また、木島始氏との四行連詩が『四行連詩集 近づく湧泉』『四行連詩集 近づく湧泉 第2集』(共に土曜美術社出版販売)に収録されている。現在、主な詩作品発表の場はwebサイト「現代詩フォーラム」<http://po-m.com/forum/>。

南野蕃子:塔野夏子と同一人物。1997年から五行歌を書き始め「五行歌の会」入会。2015年に五行歌集『硝子離宮』(市井社)を出す。ほか『愛しています 愛の告白五行歌集』『恋の五行歌 わくわく350』『恋の五行歌 300のトクントクン』(いずれも市井社)など五行歌のアンソロジー数冊に作品が収録されている。2019年秋より、栢瑚(kashiko)五行歌部(仮)として、白夜(さや)、水源純(みなもとじゅん)、素音(もとね)と四人で活動を始める。栢瑚webサイトは<https://ameblo.jp/kashikogogyoka-saya>。

* 鳥籠イラストはネット上のフリー素材をいただきました。